

# 昭和二五年版『屍の街』の文脈

—— 大田洋子が見極めた被爆五年後 ——

亀井千明

はじめに——再版の理由——

大田洋子が昭和二〇年一月「屍の街」の「生原稿」を仕上げ、それが昭和二三年中央公論社から一度出版された後、昭和二五年冬芽書房から再版された出版経緯において、検閲が一つのネックとなっていたという。特に、昭和二三年時GHQの検閲に配慮し、「無欲顔貌」の章の事前検閲を余儀なくされた事実はよく知られていることだろう。この検閲については、大田自身も検閲局の人間と交渉について「山上」（『群像』昭和二八）で小説化している。また堀場清子の『原爆 表現と検閲』（朝日新聞社、平成七）によると、事前検閲だったらしく、そのことに大田は「なかなか承服せず、担当編集者だった長谷川鑛平氏に、激しい言葉を浴びせたらしい。いままとなってみると、心配しすぎて悪かったかなアという、やましい気がします」と長谷川が堀場に語ったというのだが、その言葉から分かるように、被検閲者にとって検閲の基準は不明確であった。中川正美によると、検閲は「実はそれほど厳しくはなく、むしろ処分を恐れるあまり、日本側が自主的

・主導的に規制を行い、それこそがGHQの思惑だったとの見解を示している。これは検閲神話の実態を衝く見解であり、「屍の街」もまたその罫に陥った典型的な例といえる。

しかし検閲に対し、大田が無力だったわけではない。最近明らかになったことだが、「屍の街」公表より二年早く発表した「河原」（『小説』昭和二一・一一）において、「広島」「原爆」といった言葉を避ける形で、検閲を潜り抜けようとする形跡が見られるという<sup>3</sup>。一般的には、二三年版↓削除版、そして削除部分を回復した二五年版↓完全版と認識されている「屍の街」であるが、こういった検閲への大田の対応を考慮する限り、再版の際、削除部分は復活させた「完全」であることのみを単純に彼女が求めたとは考えにくい<sup>4</sup>。むしろ「無欲顔貌」の章のみの削除で、出版にこぎつけることを可能にした大田の出版戦略をそこに読み取ることも出来ないだろうか。さらに、二五年版は二三年版と同タイトルながら、本の構成スタイルは全く異なっている。「屍の街」一作品のみを掲載した二三年版とは違い、二五年版は序文及び原爆関連のエッセイも含んでいる。いわば「作品集」のような形式を持っている。このことから、二五年版は二三年版とは異なる意思の元、構成されていることが窺える。本稿ではこういった事実を踏まえて、生原稿や二三年版の完全版あるいは再版としてではなく、二五年版独自の文脈を探ることが目的である。

## 序のロジック

まず二五年版出版に際し、新しく書かれた序文について検討し

てみる。この序の書かれ方として、決して整然としたものといえない。それは、召還される過去の記憶と執筆時の感慨の二つを、比較的自由な形で書き表していることに拠る。しかしながら、この序が担う役割は大きいと考える。先頭に位置する序は（特に先頭から順に本を読む）読者の解釈を左右してしまう効果を持つ。現に佐多稲子は「私はこの序文、大変貴重だと思うんですよ。書かざるを得ないという気持を、私がここで解説を言うこと以上に、この序文で彼女がよく書いてますよね。」と、その役割を大きく見出そうとしていることが分かる。この佐多の発言からも、序の読者への影響力の大きさを窺うことが出来る。本節では、雑然と描かれた序の言葉を整理していくことで、全体のロジックを明らかにしていきたい。

まず、序から一番に窺い知れることとして、昭和二〇年の被爆当時から昭和二五年に『屍の街』を再版するまでの長いスパンをかけて、広島における原爆投下という事件を、文学の形にしようとする大田の強固な自覚である。それはよく引き合いに出される「書いておくことの責任を果たしてから、死にたいと思った。」といった一部分だけから分かることではない。継続して原爆問題に取り組む様子が、「五年」の間、『屍の街』を客観的に整理し、健全な心身をとり返した上で、一つの文学作品に書くことのみを考えて暮した」など、多くの箇所から窺える。しかし一つの作品を仕上げることに、時間をかける必要性が生じたのはなぜだろうか。その理由について、大田はGHQの検閲という外部事情だけに帰結させてはいない。「私は屍の街にひつからまつて、身うごきが出来なかつた。」と序の最終部分に記したように、大田

にとつて八・六の体験を作品化するには、あまりにも困難なことが多すぎたといえる。例えば書く際に「私は気分がわるくなり、吐気を催し、神経的に腹部がどくどく痛くなつた。」という身体的な負担、「小説に書きにくい素材」「新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない」といった創作手法の模索などの理由を、序において明らかにしている。また「小説を写つて人に伝えることは困難」というように、これまでの自身の作家としての経歴すら助けにならないことを嘆いている。更には「ほかの作品への意欲を挫折させた」と、大田の原爆以外の作家活動にも影響を与えたという。

一方でこういった説明は、大田が読者の存在を意識していることとの表れでもある。「読者は私の書き方をもの足りなく思われるであろう。」と言及しつつ、大田自身も「意に満たぬ多くのもどかしさを感じている」と吐露する。そもそも序自体、読者への説明的な機能を担っているといえるが、大田によって繰り返される自作の至らなさへの反省と言ひ訳は、この序の色調にもなっている。なによりそれは読者に向けられたものである。菅本康之は「屍の街」より後に書かれた「半人間」(『世界』昭和二九)の作中にある「戦後七年間、拷問されている思いです。自殺か逃避か、いい作品を書いて生きるか、三つのなかの一つだと、戦後はずっとそう思っていました。」という一文について、「それ(論者・亀井註・いい作品を書いて生きる)は、そもそもどんな基準によって評価されるべきなのか。」と問い掛け、基準としての「文壇」や「文学制度」を引き合いに出している。序において大田が意識した「読者」に、菅原の言う「文壇」等が含まれるかもしれない。

しかし、少なくとも二五年の段階において、大田は権威ある枠組みに、自らの創作活動を沿わせることを考えてはいない。むしろ、反省と言いつくを繰り返しながらも、大田は自作の問題を解消する術を、自ら序の中で規定しようとしている。それは「私にはもつとながい時間を賭けるよりほか、道がない。このことは当然のことでもあろう。」ということ、そして創作手法としては、「原型をみだりに壊さず、真実の裏づけを保つて小説に移植されるべき」といったことである。こういった意志の元で書かれた「屍の街」とは、必然的に五年間校正を繰り返すことになる。原爆を文学化する上で、以上のような自己規定する大田に、文学（フィクション）と原爆（ノンフィクション）を並存させることへの違和感はない。大田にとつての最優先事項は、未知の体験について時間をかけながらどう言語化するかにあり、そのために二つのジャンルを自由に往還する。ジャンルよりも創作目的が先に立っている。一方で、二五年版の末ページにも「昭和二十年十一月」と最初の執筆時間を記したままにしたのは、「原型をみだりに壊さ」ないとする、大田の意思の表れでもある。次節では、この言語化のプロセスについて確認していききたい。

## 二五年版に至る創作プロセス

これまで述べてきたように「屍の街」には三つのテキストが存在している。一つは昭和二〇年「生原稿」と称されるもの、後はこれまで述べてきた昭和二三年と二五年のものである。五年間の年月を経る過程で、大田の言うところの言語化がどのように実践

されていったかを、三つのテキストを比較し、異同箇所を確認していくことで明らかにしていきたい。生原稿と二三年版及び二五年版の異同については、既に浦西和彦が『大田洋子集 第一巻』（昭和五七・八、三二書房）の解題にて行っている。ここでは先行の成果を踏まえつつ、浦西の作業にはない二三年版から二五年版の異同箇所も合わせて確認していくこととする。

まず生原稿と二五年版とを比較した浦西の作業によると、四九の異同箇所があるという。その内二三年版時に既に改変されたのは六箇所に過ぎない。つまり、大田は二五年時の出版に合わせて多くの校正作業を行っていることになる。実際に二三年版と二五年版の比較作業を行って見たところ、多くの校正が確認出来た。ところで、昭和二〇年九月に開始し、四年後の昭和二四年一月末には終了したとされる原爆に関する検閲について、その基準はモニカ・ブラウによると「原子爆弾がなかったとすれば日本は戦争に勝っていたかもしれないという意見、原子爆弾は野蛮であり、人道に反する犯罪であると言う主張、そして原子爆弾を受け二つの都市の惨状の描写」は禁止の扱いを受けたという。こうした検閲に大田が意識的であったことは、二五年版において明確な軍部・戦争・原爆投下への批判発言、敗因の分析、原爆による土地・人的被害など具体的な描写箇所が一気に増加していることから確認できる。ただし注視すべきは、こうした批判的発言に伴い、ある矛盾も解消されている事実である。二三年版までの特徴として、「私はふつと戦争が続けなくなつた。好戦的な思ひが火のやうに頭をかすめた。戦争をやめてはいけない。けれど寂しかった。とりかへしのつかぬことをしたやうに気が沈み、

私は橋の上を歩くのがこはくてたまらなくなつた。」といった、戦争を賛美あるいは終戦を惜しむかのような文句が多用されていた。これらは削除されたり、あるいは次に挙げるように改変されている。

二三年版）とりわけ終戦の哀しみは、思想的に戦争をきらひ、勃発の日すでにうまく行つて五分五分に、ことによつたらめちやめちやめに、日本の土まで靡爛するのではないかと考へた、あの眉の昂るやうな思ひとはまつたく別に、心を刺してゐた。

二五年版）人類にとつて残酷より他のなにもでもない戦争の苦しみは、戦争の勃発の日すでにわかつていたのだ。めちやめちやに、日本の土まで靡爛するのではないかと考へた。あの眉の昂るやうな思ひが再び私の心に刺して来た。

「あの眉の昂るやうな思ひ」は共通して使用されるセンテンスであるが、最終的に二三年版では、その「思ひ」よりも「終戦の哀しみ」が主張される。一方、二五年版で強調されるのは「戦争の苦しみ」という「思ひ」に帰着している。

また、序でいう「原型をみだりに壊さず、真実の裏づけを保つて小説に移植されるべき」箇所については、事実の改変が挙げられる。例えば月日、軍部の部隊名、地名など詳細な部分まで改変されていることである<sup>10</sup>。さらに同じ事実でも登場人物の言葉に対する改変も目立つ。「屍の街」には、大田の一家以外に、大田が見聞きした多くの人物が描かれている。そういった登場人物の言葉は、悉く改変されているといつてよい。具体的に箇所を挙げてみるならば、病院に原爆症の治療に来た夫婦の主人の言葉で、二五年版で新たに付け加えられていることが確認できる。

二五年版）「しかしS先生、俺はひとつだけふしぎなことがあるよ。戦争は日本が大敗けを食つて、それで終つたんだらう？とにかく戦争はこの間にすんだんだね。そのくせ俺たちは戦争のために死んで行くんだぜ。戦争がすんでもまだ戦争のために現にこうやつて死んで行くんだね。そいつが不思議なんだ。」

同じく原爆症の治療に来た若い娘の言葉で、二五年版）「ですけれど、人はみな死ぬもの、あの日広島のおつた間は一人のこらず皆死ぬるというもの、おそかれ早かれ、一人ものこらずみんな死ぬ」

このような他者の言動について、当時大田自身が見聞きしたものであり、実在するものと考えていいだろう。その他者に明確な戦争批判や具体的な原爆症の病状について語らせている。二五年版でこのような箇所が目立つことから、正確な事実を、復帰させそれを記述することへの執着が見受けられる。更にこの度の原爆投下という事態に対し、批判する立場を取っているだけではない。軍部を敵視することで、無力な被害者としての立場をはつきり認識し、それを主張する。例えばそれは、二五年版で初めて書き込まれた「全く思ひがけない死の現象が降つて湧いた。」という文章からも窺える。また、原爆投下に関して二三年版までは「運命の斧はなんの宣告もなく」、「そして運命的な出来ごとのために」というように、原因を運命論に帰結させてしまつてゐる。しかし二五年版でそれは全て削除されてしまつてゐる。つまり、原爆投下という事実に対し、曖昧な態度を取つていないのも二五年版の大きな特徴でもある。また、被害者性を強調しつつ、自虐に陥る

わけではないことも次に挙げる文から窺える。

二三年版)これほどのひどい目に合はされたのに、平和がかへつて来ないといふことはないと思はれた。

二五年版)これほどのひどい目に合わされたのに、神は人類に平和をかえさぬ筈はないと考えた。神とはなに者だろう。神とはわれわれの中にある一つの思想なのだ。

これは空虚な神頼みなどではなく、「神」＝「われわれの中にある一つの思想」というように、被害者たち内部で、平和を希求しようとする。

また、接続詞の改変も一つの特徴といえる。「くけれど」は、ほとんどが「が」に置き換えられている。話し言葉の要素が強い「けれど」が、「が」へと変遷する過程に、小説という場を個人的な語りの場にせず、公を意識した語り方しようとする意思も見受けられよう。

こういった他者に語らせる手法や、公共性を持つ接続詞へと移行していった過程を照らし合わせるならば、大田は「屍の街」という作品を、私的な感情を吐露する場としていない。個人の立場を越えて、被爆経験という共通項でもって周囲との境界線をなくしていき、被害を受けた者の無残さ・悔恨という普遍性にこそ目を向けていく。そして、

凄惨な原子爆弾抄の皮膚のまま、強引に生きている人たちが幾人かあるのだつた。しかしそれも生きている屍のように、魂の痕痕を、肉體のどこかにたよわせてである。

この箇所も二五年版で新しく付されたものであるが、「生きている屍」、これこそが昭和二五年の時点で大田が見抜いた被爆の

実態である。身体的な被害は持続するという原爆被害の特質を合わせて考える時、自らも被爆によって死の恐怖を常に味わうことになった大田自身の苦悩も垣間見ることが出来る。タイトルの「屍の街」の屍は、死者のみを指すのではない。これは原爆症を背負って生きる者たちへの言葉でもある。それは二五年版を形成するエッセイ類からも窺うことが出来る。「いまだ癒えぬ傷あと」(『婦人』、昭和二四・八)／「一九四五年の夏」(『改造』、昭和二四・八、原題は「八月六日八時一分」)／「原子爆弾抄」(『女性改造』、昭和二四・八)というこれらのエッセイは全て既発表のもので、再版の前年の八月に発表されている。八・六もしくは八・九に合わせる形でメディアに要請されて書かれたきらいはあるものの、「屍の街」などの小説とは異なる与えられた場において、大田が表現しようとしたことは共通している。

原子爆弾の被害の特質は、その当時の恐怖よりも、その後に来るものの方が深く恐ろしいのだ。そのとき生き残つても、いつ死ぬかも知れないという、まるでガンに犯された者のようなそれよりももつと未知の、新しい驚がくと恐怖の世界に投げこまれることの悲惨さだ。(一九四五年の夏)

原子砂漠と呼ばれた広島に、生き残つた人たちは、貴重なものでなくてはならないはずであった。(中略)可哀そうなあの人々は、戦争の真の惨状と罪悪が、戦争している時よりも、それが終つたあとに深くくることがを、いま身にしてみても知つたことと思う。(『原子爆弾抄』)

これらを読んで私たちが気付くのは、被爆四年後当時も今現在

も、原爆に関するメッセージ性に変化はないということである。忘却しようとする者が存在し、忘却を阻止しようとする問いかけ促す言説の形は、すでにこの時の大田によって形成されていた。現在私たちの戦争に対する認識は一過性のものになりがちであるが、大田の再版への執着は、こうした記憶を忘却しようとする者たちの安易さを警告する。

### おわりに — 〈原爆文学〉の可能性 —

こういった本文の異同の跡は、大田が再版を目指した答えを示してくれる。つまり再版の事態は偶然ではなく、大田は時間を経ることで、原爆による被害の本質を見極め、自ら言語化することによって表現した。それは全て被爆者に対して、持続的に降りかかる死の恐怖でもある。フィクションという文学の形で成功しえたわけだが、八・六の惨状という過去を再現しつつ、経過した時間の中で明らかにされた被爆者たちの被害性を同時に表現しうるのに、正にうつつつけの形式だったかもしれない。(原爆文学) という概念については、フィクションとノンフィクションの二つのジャンルが共存するという矛盾を孕んでもいる。ただこの概念に可能性を見い出すとするならば、まずは表現者を先に立てることが必要だと考える。「屍の街」を見る限り、ジャンルの相違はハンデとなっていない。むしろ、大田が「屍の街」で再現しようとした被爆の問題について現実性を持たせ、フィードバックしながら五年の月日を表現するためには、この手法は必須だったと考えられる。ただ、二五年版は全て大田の意思によるものとも限らないこ

とも付け加えておかなければならない。本書の帯には冬芽書房によって、「早くも米英より翻訳出版を申し込まれた問題の書！」との宣伝文句が大きく書かれており、出版社側の販売戦略も確かに存在している。この側面からの二五年版に対する再検討の必要もあるだろう。

また昭和二五年は奇しくも朝鮮戦争勃発の年でもあり、六月二五日つまり『屍の街』再版の先々月から一九九四年の国が戦火を交えることになった。日本国が朝鮮特需に湧き、経済的に息を吹き返す中で、身近な国で再び起こり始めた戦争の悲劇を、誰よりも意識し痛感していたのは、風化される原爆・戦争の記憶に抗するかのように、再版を目指していた大田かもしれない。前述のエッセイ「いまだ癒えぬ傷あと」にも次のような文章があることを確認できる。

私の負傷のあとは現在ほんとうは痛んでいません。皮膚の傷あとでなく、もつと深い内部で、こんにちの条件に刺激されながら、疼きはじめているのです。

再版後大田が言語化のプロセスを以後どのように展開していたかは、紙面を改めて論じたい。

### 注

1 この「生原稿」は、昭和五〇年八月八日付の『中国新聞』広域版に、「親族の手に戻っていた「屍の街」(大田洋子の小説)のナマ原稿 広島「わらばん紙など350枚」「死の影におびえつつ書きなぐる」という大見出しのもと、その発見が報じられている。記事によると、生原稿は昭和二一年の初め、雑誌『中央公論』編集部に郵

送されたらしいが、校正時大田の手元に戻されたという。

2 「原爆報道と検閲」(『Intelligence』平成一五・一〇)

3 平成一五年七月二五日付ネット「asahi.com」

4 例えば、昨年出版された『原爆文献大事典』(日本図書センター、平成一六・六)の三P(昭和二三年の項)、九P(昭和二五年の項)において、「屍の街」はそれぞれ「削除版」、「完全版」と説明されている。

5 佐多稲子「解説」(『大田洋子集 第一巻』(三一書房、昭和五七・七)

6 大田洋子に対する批評言説の傾向については、拙稿「大田洋子論・序説―(原爆作家)としての神話／からの逸脱―」(『原爆文学研究』第三号、平成一六・八)を参考にしていきたい。

7 「歴史のトラウマ―大田洋子論―」(『社会学』平成一三)

8 『検閲―禁じられた原爆報道』(時事通信社、昭和六三)

9 二三年版までになく、二五年版に新たに書き加えられた箇所については以下の通り。

P 186 L 10〜11 日本はとつくに負けているのに正統に降伏もしないし、

P 21 L 10〜11 戦争の残酷さに心身ともに傷ついたからだを横たえるためである。

P 25 L 11〜12 広島市街から山を越えて広がつて来た、原子兵器の

P 76 L 1 その雨傘の柄は家と同じように、くの字形に曲つていた。

P 80 L 5〜6 見る間に広い河原は負傷者で充滿した。

P 126 L 10〜11 硝子のはへんなどの飛んで来る速度がもの凄く早か

つたと見え、誰かの裂傷も見かけより深いのだ。

P 145 L 6〜8 そしてほかの土地から来たらしい青年将校の一群は、白い手袋の手を例の板の上に重ね、冷やかな態度で、重傷の罹災者たちに座席をゆずることもしなかつた。

二三年版から二五年版において書き換えられた箇所は以下の通り。  
P 96 L 4〜5 わからなかつた。 ↓ P 129 L 5〜6 変わり果ててよくわからなかつた。

P 39 L 5 なんのことが ↓ P 73 L 8 なののために自分たちの身のまわりが一瞬の間にこんなに変わってしまったのか、

P 24 L 6 今度の定型的な熱の出方であつた。 ↓ P 38 L 1 今度の原子爆弾抄の定型的な熱の出方であつた。

P 27 L 1〜2 あの爆弾を浴びる前の広島を、 ↓ P 62 L 1〜2 原子爆弾を浴びた前の広島を、

P 31 L 5〜6 私は、あの日、四十萬前後の人が ↓ P 66 L 1〜2 私は、八月六日の日四十萬前後の人が

P 184 L 2 国家 ↓ P 213 L 9 帝国主義

10 上・二三年版 ↓ 下・二五年版  
P 24 L 3 五十度 ↓ P 37 L 12 四十度

P 42 L 5 第二部隊 ↓ P 76 L 8 第一部隊  
P 142 L 10 O村 ↓ P 173 L 13 K村

P 82 L 14 四枚 ↓ P 212 L 12 三枚  
11 二三年版の「けれど」から二五年版の「が」への変換例は、一五例見られる。